

唯一性に関する再考察

林 隆 也

朝日大学 法学部

Überlegungen über die Einzigartigkeit der Seienden On the Uniqueness of Beings

Takaya HAYASHI

School of Law,

Asahi University

Zusammenfassung

Das Thema des Aufsatzes: Es gibt nur eine Welt, die Erde und das All, wo alle Seienden völlig einzigartig sind. Wir, die Menschen, sind alle einzigartig. Das ist klar. Alle Seienden in der Welt sind auch einzigartig, und die Phänomene sind alle ganz einmalig. Deshalb gibt es keine Wiederholungen in der Welt. Es gibt nur ähnliche Ereignisse, die uns täuschen. Daraus können wir klar verstehen, dass das bisherige menschliche Wissen nur eine menschliche Fantasie ist. Vor den Menschen gibt es keine Fantasien. Begriffe, die menschliche Erkenntnis bauen, sind nur menschliche Fantasien, die keine Gründe haben; Gleichheit, Identität, Zahl, Logik, Objektivität, Paradoxa, Sprachen usw. Natürlich sind die Wissenschaften, die Religionen, die Naturgesetze und alle Tätigkeiten der Menschen völlig grundlos. Selbst diese Kritik ist auch eine menschliche Fantasie und grundlos. Aber es gibt keine Widersprüche in der Wirklichkeit. Diese selbstverständliche Erkenntnis befreit bisheriges Wissen. Das ist die Befreiung des Wissens.

1 存在するものの唯一性と、同一性の概念

我々が目にしているものは、存在するもの (das Seiende) である。全宇宙に存在するものは、例外なく、総て単一のものであり、それは唯一の存在するものである。これを我々は、存

在するものの唯一性 (Einzigartigkeit) と理解している(1)。この観点から考察を始めると、現実の世界に存在するものが、何故、それぞれがかけがえのないものであるのか、或いは、変化しながら同一であり得るのか、等々の問題を容易に理解出来るようになると期待出来る(2)。

そのためには、改めて、唯一性という概念そのものを、再度、取り上げ、詳細に考察しておこうと思う。

先ず、人間であるが、それぞれの人間が、それぞれの一人の人間として、生きて、死んで行く、という現実に異論を唱える人は、いないであろう。或る人間に置き換えることが出来る人間というものは存在しない。どの人間も、その人一人の人間として、この地球上に生きており、そして死んで行く。その人間の存在(3)は、唯一のものである。宇宙全体の存在するものから見ても、その人間は、唯一のものである。それ故、人が亡くなれば、残された者たちは、悲しくもなるし、悲嘆にくれるのである。そして、亡くなった人が生き返ることもまた、ないのである。これも、不可逆的と考えると、悲しさが倍増するが(4)、実は、不可逆性というものは、あり得ず、人間が生きるということも、ただ単に、唯一の出来事、唯一の現象でしかないのである。これを、人間が不可逆的と考えているに過ぎない。亡くなった人は生き返らない。実に残酷ではあるが、それは、この宇宙での唯一の現象として、我々人間が、どうしても受け止めなければならない現実である。そのために、人間は、宗教的なものを考え出し、生き抜くための支えを必要としたのである。このことも、古代から現代に至るまで、何も変わってはいないのである。宗教的な方法が、細かく整えられて来たか、或いは、そのまま素朴なままであるか等々の違いが、それぞれの文化や考え方を背景に変化しているに過ぎない(5)。ここで確認したいのは、とりあえず、人間が唯一のものであるということである。

しかし、同一性となると、理解することは容易ではない。我々人間が、自己の同一性をどのように維持しているのか、その同一性を何が確保しているのか、瞬時に答えることが出来る人は、それほど多くはないであろう(6)。自分は自分である、というのは、簡単なことであるが、10年前、20年前の自分と、現在の自分が同一であるかどうか、我々は、どのように理解することが出来るのか、これは簡単ではない。1秒前の自分、5分前の自分と今の自分は同じだ、と考えるのは、時間の経過の問題であり、5分前も、20年前も、同じことである。肉体的には大きく異なっているが、人間として、同じ人間である、という保証は、何処にあるのか。そして、もちろんではあるが、20歳の若者が、30年前のことを考えると、自分の同一性を問う前に、自分がどの時点から存在し始めたのか、という別の問題に直面する。これらは単に時間的な問題であろうか。

そこで、唯一性を考えると、そもそも、人間は唯一であり、或る人間の複数もなく、それ以外の存在の仕方様態もあり得ない。単数、複数、という概念は、複数の存在があって初めて成立する。同じ人間は、どこにもいない。しかし、それは、一人の人間の同一性 (Identität)

を語っているのではない。誰もが一人であり、唯一である。我々が目にしていないものは、その時点でのそれぞれ生きている人間であり、それ以外ではあり得ない。その現実を、人間は、或る一人の同一の人間として捉えているに過ぎない。その時、同一である、というのは、人間が、或る時間の範囲内で、変化を捉えることが出来ずに、同じものであると誤解した結果の概念である(7)。同一性は、唯一性を見落とした結果の誤解であり、人間が考え出した単なる概念である。それ故、現実の世界の中には、このような概念に相当するものは存在しない。一人の人間が、その人間として、同一であり、他人ではない、という理解は、このような誤解から生じている。5分前の自分と、20年前の自分は、それぞれがその時点での唯一の存在するものなのである(8)。

ここで、人間の唯一性から、存在するもの全般へと拡張しても、実は、何の問題も生じない。そもそも、存在するものの中に、人間が存在しているに過ぎないのであり、人間だけが特別ではない。人間だけが唯一のものである、というのは、人間の単なる思い込みに過ぎない。人間が存在することと、人間以外のものが存在することには、何の違いもない。人間の唯一性は、存在するもの全般に関しての、単なる一例でしかない。これを誤解して、人間だけが唯一である、と考えると、現実から隔たってしまうのである。それがこれまでの幾つかの思想の失敗だったのである(9)。現実の世界には、全く同一の存在するものは、瞬時たりとも存在していない。総ての存在するものが、常時、変化しつつある途上であり、その都度が、唯一の存在としてしか、存在することはあり得ないのである。一つの対象に関する同一性と、他との一致としての同一性 (Gleichheit) は区別すべきものであるが、前者は、人間の同一性に関して考察しており、後者に関して言えば、そもそも、そのような他のものとの同一性はあり得ない、と指摘しておく(10)。それ故、人間は、極めて類似しているものを捉え、同じである、と概念として考えて来たのである。

以上のことから、再度、確認しておく、存在するものは、総て唯一のものであり、同じ状態であることもあり得ず、同一でもなく、それぞれが、その都度の唯一の現象として、宇宙の中で存在する。人間が唯一であることを容易に理解出来るのであると同様に、総ての存在するものが、宇宙全体をも含めて、唯一のものなのである。今日、見ている太陽は、昨日の太陽ではない。それどころか、ついさっき見ていた太陽は、今現在、見ている太陽ではない。我々は、同じ太陽を見ることは決してないのである。太陽も地球も、一つしかなく、このことは、宇宙の存在するもの総てについて妥当する。我々自身が、昨日の我々ではなく、昨日の我々の発言は、現在のものでなく、明日の発言は、また違うものになるだろう。我々は、単に、類似した事柄を述べ続けるに過ぎず、それ以上のことは、不可能である(11)。総ての存在するものは、唯一で変化の途上にあり、我々は、それを確固たるものとして捉えることは困難である。それが、我々が生きて、知っている現実の世界での出来事なのである。そこには、アイデアもな

く、数もなく、実体もなく、形而上学もなく、大陸合理論もなく、経験論もなく、本質直観もなく、言語分析もない。この点を確認すると、アリストテレスの本質 (*οὐσία*)、デカルトのコギト、ヒュームの経験論、カントの純粹理性や判断力、ハイデッガーの存在、ヴィトゲンシュタインの言語ゲーム等々について、それぞれ、検討し直せば、従来とはかなり異なる理解が得られるであろう。人間が考える、ということは、果たしてどういうことなのか、そこから生じた知識というものが、一体、どういうものであるのか、我々は、今、改めて、考察し直す端緒を持ったのではないか。

2 唯一性と知識

総ての存在するものが唯一である、という観点からすると、では、我々が従来、考えて来た膨大な知識は何であるのか、という疑問が生じる。

簡単どころから始めると、我々は、物の数(かず)を数えるために数字を用いる(自然数)。目の前に並べてあるリングを見て、それを1個、2個と数を数える。しかし、数えることが可能であるのは、リングという果物を、1つの同じ果物であると確認しておく必要がある。そこにナシが混じっていると、リングが2個、ナシが1個、と区別をして数えることになる。ここでは、リングとナシを区別するために、その特徴に依って分ける(分かる)必要があり、そこで、理解することは分けることだと、考えたりするのである。しかし、そもそも、このリングとあのリング、さらにナシと、どれも異なっており、混同する余地もなければ、このような分ける操作も理解も生じない。我々が対象としているものは、それぞれの唯一のものであり、混同こそ、目の錯覚であるとか、見落としであるとか、不注意であるとかの結果である。

この場合でも、果物の数と考えれば、区別がなくなり、果物3個である。しかし、そもそも、リングというものは何であり、果物というものは何であるのか、数を数えるためには、先ず、その枠組みを決めなければならない⁽¹²⁾。それは、リングはリングである、という理解であり、赤いリング、青いリング、黄色いリングも、どのリングも色は違ってもリングである、という理解である。赤いリングに限定しても、赤いリングが幾つか並んでいるのを見て、その数を数える時には、赤いリングである、と即座に理解する必要がある。しかし、それぞれの存在するものは唯一である。リングもまた、それぞれが、それぞれの赤いような色をしたリングのような果物であるが、1個、1個が異なるものであり、決して「同じ」リングがある訳ではない。このような場合、リングとは、このような果物である、という理解を作っておく必要がある。それがリングと呼ぶことが出来る果物の特徴となり、他の果物から、リングを識別する指標となる。

ところが、区別することの困難さは、日常的に体験として我々は十分、知っている。例えば、

七色の虹の色の区別が何処で出来るのか。地域により、虹を5色、6色であると捉える場合もあり、全く一定ではない。真っ赤な太陽も、ドイツでは黄色い太陽である。このような例は、際限なくある。植物と動物の区別、生物と物質の区別等々、当然そのような区別があるのかのように考えられて来たとしても、改めて問い直すと、実は曖昧であることが分かるような場合もある。そして、このような区別を設けることで、人間は、対象を識別し、他との区別を分かったかのように、理解を広げて来たのである。そして、それが膨大な知識として考えられて来たのである。その結果、ロケットが宇宙へ飛んで行くし、個人がパソコンで作業も出来るようになった。ところが、唯一の存在するものを対象としながら、我々は、本当に区別をして来たのであろうか。

細菌、バクテリアは、小さな生物である。これをばい菌であるとか、善玉菌、悪玉菌であるとか呼んだりするが、そもそも、細菌からすれば、善玉も悪玉も意味は全くなく、ただの細菌というだけのことである。同様に、害虫と益虫の区別も、虫からすれば、いい迷惑で、時には害虫扱い、時には益虫扱いという場合もある。これらは、人間が勝手に決めつけて対象の性質を決定している場合である。しかし、害虫を駆除し、益虫を保護して来たのも人間である。虫は、場合によって、駆除されたり、保護されたりで、いい迷惑だというのは、こういう事情である。虫は、虫として、それぞれが一匹ずつの存在するものとして、地球上にたまたま居るだけである。人間のために居る訳ではない。簡単なことの確認であるが、このように、人間は、人間のために恣意的な知識を大量に蓄積しているのである。思想や文化で言えば、西洋的や東洋的という見方も、単なる思い込みに過ぎない。

ただし、人間は、人間にとって必要なものを生み出し、生き延びてきたのであり、人間が作り出したもので、不必要であったものは何一つとしてない。というよりは、人間は、生き延びるために知識を必要としたのであり、人間のために、唯一の存在するものを誤解しながらも、膨大な知識を作り出して来たのである。フランスのラスコーのような洞窟の内部に描かれた絵画は、当時の人々にとっては、それを描かなければ生きていけないようなものであったのであり、そのような絵画を描くことで、生き延びて来たに違いないのである(13)。宗教的なものや数字の概念も、そのようなものであり、いずれも人間が作り出したものでありながら、人間にとっては、それがなければ生きてはいけないようなものなのである。それを生み出す力が考える力 (Denkenskraft) なのである(14)。

3 唯一性からの帰結

では、存在するものを唯一である、と確認することに依って、何が生じるのか、という問題である。

ユークリッド（エウクレイデス）やプラトンの幾何学から言っても、数学は、何といても、最も客観的であり、現代に至るまで、自然科学の基礎である。しかし、そもそも数の概念は、一定ではない(15)。数の概念が一定せず、それが数学の理解の仕方に混乱を生じさせている(16)。何故、このようなことが起きるのか。

数というものも、概念であって、宇宙に独立的に「客観的に」存在するものではない。「宇宙の果てでも、数の1、2、3はある」と考える数学者もいるであろうが、残念ながら、その可能性は薄い。数は、この地球上で、人間が考える力に依って作り出した概念に過ぎないからである。先にものべたように、数（かず）を数える、ということは、同じものが複数ないと始まらない。小石を並べて、1個、2個と数えるのは、それが小石である、という理解の下で初めて可能である。リング1個とナシ1個を混同すると、リングが2個になるが、それは、リングとナシを区別出来ない場合に生じる。同様に、リング1個と、リング10個入りの1袋を考えてみると、1個と1袋を足し算して、2とは計算しない。それは、リング1個と、10個入りの袋とは、別の概念であるという理解があるためである。これは、センチメートルとインチでも同様であり、また小学校で習うセンチメートルとメートルの足し算でも容易に理解出来る。これらは総て、操作の内容を先ずもって理解し、その上で、単位が異なれば、足し算は出来ない、と判断しているのである。しかし、ここで表現されている数字の1は、1個でも1袋でも、1である。1という客観的な数があるのであれば、いかなる場合でも、 $1 + 1 = 2$ にならなければならない。しかし、このような足し算をする人はいない。教室で、1cmと1mを $1 + 1 = 2$ と書けば、正解ではない。数は、ものを数える場合に、1個、2個と始まり（自然数）、そこから計算方法に依って、 $1 + 1 = 2$ を決定する概念の作業である。ということは、実は、数の概念は、既にそれ自体、現実の世界の現象を表し切れてはいない、ということでもある。

幾何学で考えると、この点は明白である。ユークリッド幾何学において、直線や円の定義が与えられるが、現実には、そのような直線や円は存在しない。古代エジプトの測量術で、測量をする場合には、現実の広さを、或る基準に従って、測定出来れば、十分、実用であったはずである。それを現実とはかけ離れた図形の問題にすると、たちまち、幾何学という概念だけの学問になってしまう。そして、そこで扱われる三角形や円は、現実のものではない。これを的確に示しているのが、正方形の対角線である。数学では、1辺1の対角線は、無理数の $\sqrt{2}$ となり、比としては表すことが出来ず、無限小数である。しかし、現実には、1.4の長さを木の板で作り、辺と辺の間に挟み込み、強度を付けるのである。この意味で、1辺1の正方形の対角線は、現実存在する。その存在を、概念として空想した場合、1辺の長さ1を用いて、表現することは出来ない、というだけのことである。対角線は存在する。しかし、それを数で表現できず、無理数を使う。これは、どういうことなのか。つまり、数の概念は、現実を表す

ことが出来ず、更に、新たな概念を作り出して、対象に当てはめてしまった、ということである。そして、無理数は、人間の考える力に依る概念の世界にしかなく、それは、直線や円と同様である。これは、その後、虚数や無限や極限といった数学の多くの概念へと展開する。しかし、そのようなものは、数学の概念的な世界での操作であり、現実から、更に遊離する結果になったのである。数学の世界というのは、概念の中で、どれ程の操作が可能であるか、ということなのである。しかし、現実の世界は、常に概念よりも広く、概念で現実の世界を捉えきることもまた、不可能である。

このことは、数を言語に置き換えれば容易に理解出来るように、言語を用いて概念を作り出して来た哲学でも全く同様に妥当する。我々が今、現在、やっていることもまた、この程度のことなのである。つまり、数学も哲学も、概念を操作しているに過ぎず、全く同類なのである。

そこで、一般的に自然科学における「客観性」が問題となる。

そもそも数の概念が曖昧であるが、その数を用いた自然科学は、本当に客観的であり得るのか。自然科学は、客観的なものであり、証明が出来、再現可能であると考えられている(17)。ところが、そもそも、存在するものは唯一のものであり、証明も、再現も、実は不可能である。証明も再現も、ひたすら類似の出来事を考察し、扱い、非常に類似の出来事を確認する作業に過ぎない。全く同じことは、起きない。どれ程、類似の条件を整えても、不可能である。つまり、自然科学での確証は、いかなる場合でも、類似の出来事を並べるに過ぎず、類似の事柄を用いて、同じと考えられるようなことを作り出しているに過ぎない。

さらに、数を用いた客観性に関して言えば、時間、空間、重さについて、或る一定の基準を決め、それとの比較をする、という作業が、数字で表される結果である。1秒や1mや1kgは、人間が任意に決定した単なる基準であり、その基準自体に何の根拠もない。1秒をどれ程、正確に作り出そうとしても、地球が自転し、太陽の周りを公転する時間の経過こそが人間にとっての時間であり、人為的に作られた時間の長さには、実は意味はない。これも、概念と全く同様である。1秒を作り出しても、現実には、そのような1秒はない。1mや1kgともなると、インチやポンドがあるように、基準は、便利で使い易いように決定されているに過ぎない。そして、いずれの場合でも、総て、基準との比較が数として表現され、客観性の指標となっている。それ故、単位が異なれば計算は出来ないことを、先に示したのであり、我々は、それを当然のこのように理解しながら、実は、その作業の不安定さに全く気が付いていない。このように、数を用いた客観性は、単なる比較考量に過ぎず、実は、何の保証もないのである。

その上で、論理自体が問題となる。

論理的ということが、科学的客観性でもあるが、先に論じたように、対象自体の同一性が成立しない。同一性は、唯一性の誤解であった。つまり、 $A=A$ は、成り立っていない。これは、人間の概念を用いて考えた結果であり、左辺のAと右辺のAが同時に成立する場面は、

現実には存在しないのである。これもまた、唯一性の観点からすれば、余りに自明である。さらに、 $A=B$ ともなると、絶望的である。これまでの考察から、 A と B が一致するという保証は、どこにも見出すことが出来ない。この等式の両辺のそれぞれの内容を考えると、その内容を理解出来ることが先決であり、内容自体が不明な場合は、等号は全く機能しない。或いは、拡張して、形式に限定したところで、それは、数学的な規則を適用するに過ぎず、そのような規則は、これもまた、先に考察したように、概念の世界でしか通用しないのである。つまり、等式や等号を用いて表現すれば、あたかも客観的であるとか、科学的であるとか、通常は考えるかも知れないが、実は、そのような客観性や科学性こそが、人間の概念の虚構性の上に成り立っているに過ぎないのである。それ故、社会科学という表現で言えば、社会そのものが概念であり、科学もまた単なる概念で、客観的であろうとしたこと自体が、実は、機能していない、ということに結果するのである。

論理学は、内容の意味を前提にしなければ成立せず、それは、数式自体が意味を持った規則の世界での作業であるからである。いかなる場合でも、規則自体の意味が理解出来なければ、いかなる作業も出来ない。論理学自体が、そのような性質のものであり、内容を抜きにして、単なる形式だけで考えることが出来る、ということもまた、不可能なのである。数式というのは、非常に限定された作業であり、現実の客観性を保証するものでも何でもないのである。それ故、論理式を用いて表現すること自体が、人間の現実の世界からひたすら遠ざかることなのである。それは、1と0を用いるデジタル情報が、現実のアナログ的な世界を決して正確に写し得ないことと同様である(18)。

言語の分析に関しても、唯一性の観点からすれば、考察は容易である。

音に対する反応が、音声言語の端緒であろうが、それも、類似の音に対する類似の反応であり、その都度の反応が繰り返され（それぞれが別の反応）、そのような反応が、類似として生じ、それを言語として、考えるようになった、と考えることが出来るであろう(19)。動物の鳴き声から、人間の言語への飛躍が、どこかで起きるのである。そして、そのような音声は、何らかの内容を示し、人間の間での伝達の役割を担う。そのような反応は、単に類似の条件に従うだけであり、何らかの規則というものがある訳でない。規則は、言語を観察し、その構造を検討した結果に生じるのであって、規則があつて、言語が生じるのではない。この規則を文法と考えるようになるのは、さらに後のことである。文法があつて、言語が出来るのではなく、言語はその都度の反応として使用され、文法は後に人為的に考えられるに過ぎない。それ故、どのような言語の文法を見ても、例外だらけなのである(20)。この点についても、前に検討した概念と現実の関係と、全く同様である。それ故、言語をどれ程、精緻に分析したところで、常時、変化し続ける言語を正確に捉え、理解することは、ほとんど出来ないのである。その上、言語の分析に限らず、客観性も科学性も、何も保証されないのである。

言語に関して言えば、矛盾（パラドクス）もまた、従来、様々に論じられている。しかし、これもまた、人間が考え出した事柄に過ぎない。何でも突き通せる矛は、人々の願望であろうし、何でも防げる盾もまた、人々の願望である。しかし、そのような願望は、単なる想像の世界での話であり、そのような矛も盾も現実には存在しない。矛盾という表現は、人間が考え出した空想の話である。どのようなパラドクスも同様であるが、怪獣のゴジラとキングギドラが戦うとどちらが強いのか、と論争をしているようなもので、そのような論争自体は、関心がある人々にとって、果てしなく続いて何の問題はない。

このように、我々が蓄積してきた知識が、不安定な地盤に形成されており、我々は、そのことを確認した上で、人間の知識を考察しなければならないであろう。存在するものの唯一性は、その状況を我々に示すのである。地球上に存在する人間というものが、一体、どういうものであるのか、宇宙全体がどうなっているのか、そのようなことを考えるのも人間だけであるが、その地盤を確認しながら、瞬時に変わり行く光景を眺め、何の保証もない考察をし続けることこそ、「考える」（Denken）ことではないか。

注

- 1 拙論「知識の解放 序論」参照。
- 2 唯一性については、以下の論文を参照。佐藤邦政「唯一性という概念についての分析」
- 3 これは、存在すること *das Sein* であるが、ハイデggerのような存在論の分析は行わない。
- 4 このことも、人間の感情が人間に依って作られているものである、ということを示している。
- 5 宗教については、改めて考察する必要がある。
- 6 ヒュームの人格の同一性については、以下の論考を参照。久米暁「人格の同一性についてのヒュームによる再考」26-38ページ。
- 7 「知識の解放 序論」48ページ以下
- 8 しかも、現時点という瞬時の時点を決定的することもまた不可能である。時間は、直線的にせよ、円環的にせよ、一時停止もなく、経過し続けているためである。
- 9 人間が人間として物事を考え始めた時点から、このような失敗を積み重ねて来た、とも考えられる。
- 10 後述するように、 $A=A$ も $A=B$ も現実では成立しない。
- 11 自己言及のパラドクスではないが、これも、以前指摘したように、既に処理済みである（「知識の解放 序論」）注6参照）。
- 12 アリストテレス『形而上学』参照
- 13 単なる推定に過ぎない。
- 14 これを理性（*Vernunft*）や悟性（*Verstand*）などと分類するより、一つの力で捉える方

- が、現実の人間に近いであろう。その程度の理解の仕方であり、これに代わる概念（これも作りものであるが）があれば、この表現にこだわる理由は何処にもない。
- 15 『数学辞典』183-184、足立 1-10、“Zahl”, Europäische Enzyklopädie zu Philosophie und Wissenschaften, Bd.4, S.967-969、“Zahl”, Philosophisches Wörterbuch, 796
- 16 論理主義、直観主義、形式主義『数学辞典』184-185。
- 17 カール・ポパーの反証可能性については、かつて論じたが、前提が問題であることは、当時から明らかであった（拙論「境界設定問題と理性」）。
- 18 量子コンピューターにしても同様である。唯一のアナログ的な情報は、デジタルに置き換えることは不可能である。
- 19 言語の起源については、余りに検討材料が乏しく、これも単なる推測である。
- 20 複数の言語について文法の簡略な比較検討から言っても、特に、ドイツ語の名詞の性（男性、女性、中性）は、形からでは、例外を除いて、ほとんど判別不可能である。

参考文献

足立恒雄『数の発明』岩波書店、2013年

『岩波 数学辞典 第3版』日本数学会編、岩波書店、1985年

『岩波 哲学・思想事典』広松渉他編、岩波書店、1998年

久米暁「人格の同一性についてのヒュームによる再考」京都大学哲学論叢(1997)、24：26-38

佐藤邦政「唯一性という概念についての分析」

<https://www.chs.nihon-u.ac.jp/institute/human/kiyou/83/4.pdf>

林隆也「境界設定問題と理性」、『「開かれた社会」の哲学』長尾龍一他編、未来社、1994年、144-152ページ。

林隆也「知識の解放 序論」、朝日大学教職課程センター研究報告書 第20号、2018年、45-52ページ。

Aristoteles: Philosophische Schriften. 1-6 Bd. Hamburg/Meiner, 1995

Descartes: Œuvres et Lettres, Gallimard, 1953, 1999

Heidegger, Martin: Sein und Zeit. Tübingen/Max Niemeyer, 1979

Sandkühler, Hans(Hrsg.): Europäische Enzyklopädie zu Philosophie und Wissenschaften, Bd.4, Hamburg/Meiner, 1990

Schischkoff, Georgi(Hrsg.): Philosophisches Wörterbuch, Stuttgart/Kröner, 1991